

テサロニケ人への手紙 #12

「キリストの再臨についての正しい態度」 | テサロニケ人への手紙 5章 1節～11節

2020.12.06

はじめに

12月に入り、アドベント第2週目になりました。今年のアドベントは例年とは違い、特別なものになりました。世界的パンデミック、新型コロナウイルスの感染爆発によって、礼拝に自由に集まることが困難になってしまいました。私たちの教会もできる限りの対策をとり、インターネットなどを活用して礼拝を続けております。このような状況の中で迎えた今年のアドベントに、主はこの群れに御言葉を通して何を語ってくださるのか、大いに期待したいと思っています。先回の1テサロニケ4章後半では、すでに死んだ信徒たちについて、不安がったり、悲しんだりしないようにとパウロは教えました。なぜならば教会の携挙の時には、まず、すでに死んだ信徒たちが主イエスと同じようによみがえり、その後地上に生きている信徒たちが、主イエスと同じ栄光の体へと変えられます。そしてこの両者は共に花嫁なる教会として、天に携えあげられ、いつまでも主と共にいることができるのだ。そしてこの素晴らしい神さまのご計画をもって互いに励まし合いなさい。と教えました。先だってK・Iさんの告別式が11月25日に執り行われました。彼もまた多くのキリストにある聖徒たちと共によみがえり、キリストの花嫁の一員として携えあげられる。私たちクリスチャンは、この御言葉に立って、感謝と将来への希望をもってこの地上生活を歩んでゆけるのです。

さて、キリストの再臨に対する間違った態度として、いつの時代も二つのものがありました。一つには、熱狂的な期待をもって待ち望むものです。すでにテサロニケの教会にはそのような人たちがいました。何もしないで、ただキリストの再臨を待ち望んで集会だけをしている。そのような人たちは自分たちと同じ信仰を持たない人を裁く特徴があります。それは愛の欠如という形になって表に現れてくるのです。もう一つは、無関心です。未信者のように「キリストの裁き、再臨」に無関心な人は、聖い生活を求めることをしなくなり、この世的な価値観で肉体的放縦な生活をするようになっていきます。そこで私たちは、今日の聖書箇所から、キリストの再臨についての正しい態度について学びたいと思います。

アウトライン

1. 主の日はいつくるのか
 2. 信者と未信者
 3. 目を覚ましていても、眠っていても
1. 主の日はいつ来るのか

5:1 兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。

5:2 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。

携挙について語ったパウロは、次に主の日について教えます。主の日とは、旧約聖書でよく使われる言葉で、「神がこの地上を裁かれる日」を指します。

イザヤ 13:6 泣き叫べ。【主】の日は近い。それは全能者からの破壊としてやって来る。

イザヤ 13:9 「見よ、【主】の日が来る。憤りと燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廃（こうはい）に帰し、主は罪人どもをそこから根絶やしにする。

新約聖書でも同じ意味で使われています。

Ⅱペテ 3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。

新約時代の私たちは、これを「患難時代」と呼んでいます。

ここでパウロは、その時と時期については、書き送る必要がないと断言しています。患難時代もキリストの再臨も、その瞬間（カイロイ）、またその時期（クロノイ）を知ること、また確定することについては主イエスご自身も、繰り返し忠告しておられます。

マタイ 24:36 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

使徒 1:7 イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

イエスがおっしゃた「知りません」とか「知るところではありません」という表現は、ユダヤ的な言い回しで、これは「関心の対象ではない」という意味です。つまり私たちは再臨や患難時代がいつあるのかの時期については、知らされていないばかりでなく、関心を払う必要もないということです。テサロニケの教会の人たちは、このことについては良く教えられていました。彼らは主の日がいつあるかではなく、誰にも知らされていないことを知っていたのです。

5:2 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。

5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。

次に、「主の日がどのようにやってくるのか」の重要な教えが記されています。それは二つの比喩を使って教えられています。

第一の比喩は、盗人が夜やって来るように来るというものです。みなさんは泥棒に入られた経験がありますか？ふつう盗人は私たちに電話をしてきて「もしもしこんにちは、私は泥棒をしています〇〇と申します。今晚、何時何分にお宅にお邪魔して、金銭並びに貴重品を頂戴に上がります。」とは教えてくれません。またこの当時は、現代のような電気も照明設備もありませんから、真っ暗です。盗人は夜の闇に紛れて、まったく予期していない時に侵入してくるわけです。ちょうどそれと同じように、キリストの再臨も患難時代も突然、突如として来るのです。

第二のたとえは妊婦の出産です。ちょうどY姉が、帰省されて出産の準備をされていますけれども、こちらのたとえは、「突然性」と同時に「確実性」を表わしている比喩です。盗人の場合はその家に侵入するとは限りませんが、妊婦の場合は確実に出産します。しかもそれがいつであるかは正確にわかりません。現代は出産予定日というものがありますが、それも決して確実とは言えません。早くなったり、遅くなったりします。再臨、患難時代は確実に来る、しかし正確な時は父なる神しかご存知ではない。ということです。

そして、ここには非常に厳しいことが書かれてあります。**突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。** 彼らとはキリストを信じることを選ばず、地上に残った人たちのことです。神の裁きである人類歴史上もっとも厳しい患難が彼らを襲い、そこから逃れることは決してできません。これらの事をストレートに語る時、ある人は「私を恐れさせて信じさせるつもりか」と非難するかもしれません。また「そんな絵空事をあなたは信じているのか」と馬鹿にされるかもしれません。使徒パウロも同じように非難されました。現在コロナウィルスによって世界中で、6500万人が感染して150万人が亡くなっています。2020年がこのような年になるとは誰も想像だにしていませんでした。しかし患難時代はコロナとは比較にならない天平地異や災害が起こります。まさに妊婦に出産が近づく時陣痛があるように、患難時代に向かったの陣痛の一つとも言えるのが今年の新型コロナウィルスなのかもしれません。

2. 光の子どもと闇の者

5:4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。

5:5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。

パウロここで、キリストを信じる者と信じないものを対比させて、キリストを信じる者は患難時代を通過しないと教え励まします。**光の子ども、昼の子ども**に対して**闇の者、夜の者**とは、「神が共にいる世界」と「神なき世界」を示しています。**神は光であり、神には闇が全くない**と聖書にある通りです。福音を信じ、キリストに信頼する私たちは、主イエスキリストご自身が身代わりとなって、恐ろしい神

の裁きを十字架上で受けてくださったので、患難時代を通過することがないのです。教会がなぜ、しばらくの間、天に引き上げられるのか。それは患難時代を過ぎ来させるためです。なんとという恵みでしょうか。出エジプトの時に、イスラエルを去らせることを拒み、かたくなになったパロに対して、神は10の災いをエジプトに下されました。しかしイスラエルの民はその災いの被害を一切受けることはありませんでした。神がご自分の民を守られたからです。そしてエジプト中の長子を打たれた最後の災いの前には、小羊の血を柱と鴨居に塗るように命じられました。私たちは神の小羊であるメシアの流された血によって救われただけでなく、将来起こる患難時代をも過ぎ来させてくださるのです。まさに今は恵みの時代です。

5:6 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。

5:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。

私たちは、神の子ども、光の子どもとして、すでに再臨についても、患難時代についても御言葉のメッセージを通して知らされています。ですから、不用意であってはなりません。ほかの者たちのように眠っていないでとはキリストの再臨や携挙を知らない未信者のように、霊的・道徳的無関心で心の備えをしていないことを指しています。反対に目を覚ますとは、きたるべき神の裁きである患難時代を十分意識して、聖い落ち着いた生活をするを意味しています。主といつも交わることによって霊的に覚醒していること、御言葉に教えられ道徳的にも注意深く生活することです。

このように言うとクリスチャンは何か禁欲主義者のように思われるかもしれませんが、まったく真逆です。キリストの再臨を待ち望むクリスチャンは、現実の生活が生き生きとし、希望にあふれた歩みをするのできるのです。

3. 目を覚ましていても、眠っていても

パウロは具体的に昼の者、キリストを信じ、贖われた者として次のことを勧めます。

5:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいきましょう。

これを読むと思い出すが、エペソ人への手紙6章にある神の武具です。ここではエペソの簡略バージョンと言っているかもしれませんが。クリスチャンはこの世では霊的戦いを戦っていかなければならないキリストの兵士でもあります。パウロは胸当てとかぶとという敵の攻撃から身を守る武具を、しっかりと身に着けているように勧めます。そしてこれは、この手紙の最初にも出てきたキリスト教信仰の柱ともいうべき、信仰と愛と希望によってです。

この3つを防具を確認しましょう。

信仰とは、神とその御約束、すべての罪がキリストのゆえに赦されているという信仰です。

愛とは、神が私たちが愛してくださっているように、感謝と喜びの心をもって神と人を愛する愛です。

希望とは「救いの望み」です。テサロニケの信者たちは、もちろんすでに神の救いに得ていましたが、その救いはキリストの再臨によって完成します。その完成を待ち望むのです。

パウロはこの「救い」という言葉を好んで使いましたが、次の9,10節にキリストによる救いの二つの面が素晴らしく表現されています。

5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定め
てくださったからです。

5:10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主と
ともに生きるようになるためです。

私たちが救われたのは、神の御怒りである患難時代から救い出すためであり、永遠に主と共に生きるためです。パウロはここではっきりと、私たちの救いが、主イエスキリストの死に基づくものだと記しています。目を覚ましていても眠っていてもというのは睡眠のことではなく、生きていても死んでいてもという意味です。ですから地上で生きていても、また死んでしまっても主は共におられるのです。

この真理を要約しているのが、ヨハネ 3:16 です。

ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者
が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

パウロはこれらの御言葉をもって、兄弟姉妹が励まし合い、高め合うことを勧めています。テサロニケの教会はすでにそれを行っていましたが、続けて行うことが大切です。神様は誰一人として、一人で信仰生活を送ることを望まれてはいません。不完全で、いまだ信仰の完成の道半ばにある私たちは神の家族が必要です。気落ちしている兄弟、恐れている姉妹をとりなし励まし、時には励ましてもらい、祈ってもらいましょう。神に用いられやすい人とは自分の弱さを隠さず出せる人です。長浜純福音キリスト教会につながる一人一人は、信仰の創始者であり完成者であるイエス様から目を離さず、再臨を待ち望むことに事によって力をいただいてまいりましょう。また互いに高め合うこと、教会が御言葉によって成長することを神様は望んでおられます。

おわりに

本日のアドベント待降節2週目は、最初に申しましたようにキリストの再臨についての正しい態度について、御言葉から教えられました。まとめますと

まず第一には、再臨や携挙については、時や時期について確定することに、関心をはらってはいけないということです。そしてその時を教えたり、預言したりする群れや人がいるならば、それは聖書的ではないということになります。

第二には、熱狂的であったり、反対に無関心であってはならない。火でたとえるなら、わっと燃えてすぐに消えてしまうような信仰でなく、またいつまでも発火しない冷たい不信仰でもなく、炭火のようにふつふつと燃えつづける信仰、靈的に目を覚まし続けていることです。

第三には、信仰と希望と愛で身を固ためたキリストの兵士であることです。そして教会は再臨の希望によって励まし合い、成長することです。